

【3ヶ月後の被災地】

今回私たちが訪れた6月11日は、地震発生からちょうど3ヶ月目にあたりました。陸前高田の瓦礫はずいぶんと取り除かれ、気仙沼も一月前は手つかずのようには見えましたが、大きな重機が入るようになり、さかんに瓦礫撤去がおこなわれていました。石巻も似た状況にあります。しかし、復興に向けた動きの中で、より深刻な事態があることも明らかになってきています。現地で耳にしたいくつかの話を整理してみました。

1 略奪? 津波に流されていない場所にあるドラッグストアが、先々週まで壊れた瓦礫の撤去をおこなっていました。「津波に流されていないのに…なぜ?」と、現地に行くたびに不思議に思っていたので尋ねてみると、「津波での被害ではなく、略奪にあった」とのこと。そういわれてみると、高い場所の窓も石で割られた様子で、明らかに津波の被害とは違います。震災直後は、商品が残っていたコンビニも略奪にあったとも聞きました。

店舗だけではなく、被災した民家もねらわれているようです。一階が流され、避難所での生活を余儀なくされている家庭も多いわけですが、そうした家からいろいろなものを盗んでいく者がいて、とても物騒だといえます。片づけのために2階で生活していると、夜、よく下から物音が聞こえることがあるとのこと。話しをしてくれた女性の地域では、「これは中国人の仕業に違いない」という噂が立ち、その地域では、お互い道で出会ったら大きな声で挨拶をし、不審な者が入れないようにしていると教えてくれました。関東大震災の時には、在日朝鮮の人に対するデマが流れたことは有名な話ですから、「歴史は繰り返されるのか」と思わざるを得ませんでした。女性への暴行事件も起きているようで、一時は警官が避難所をよく訪れたそうです。

2 避難所の差 ほとんど報道されることはありませんが、避難所間の「差」「違い」が大きいようです。例えば、食事。ある避難所では、朝と昼用におにぎりやパン、夜はお弁当というメニュー。別の避難所では、自衛隊の炊き出しが毎食あって、お味噌汁やスープもつきます。避難所の壁には献立表が貼ってあるといった具合です。こうした「差」が生まれてくるのがなぜかはわかりません。私たちがお世話になっているモビリア避難所では、共同調理で食事を作っていますから、こんなにも避難所によって事情が違うものかと驚かされます。

どこの避難所でも、運営組織を作っていて、班長さんを中心に物事が決定され進められているようです。その運営のお手伝いに、神奈川県からも県職や市職の方が、1週間単位で避難所に入られているところもあります。避難所運営のために、現地の臨時職員の方がおられる場合もあります。そのような方々は、外からはわからないたくさんのお仕事があるようで、いつも忙しそうです。

避難所の雰囲気にも差があるようです。避難している人たち同士の対立が表面化しているところでは、トラブルの仲介に運営のお手伝いの方が関わることもあり、場合によ

っては、夜通し避難所の安全監視をしている県職の方もいらっしゃると思いました。

先に書きました略奪の件にしろ、避難者同士の対立にしろ、私たち外部がコメントできる立場にはないと考えておりますが、それでも、こうした事実が起きるほどに、避難している人たちの状態が極限に近いことを理解しなければいけないのではないのでしょうか。「日常に戻ることが被災地支援につながる」というかけ声が大きくなる今、「避難生活の実相」を理解することが求められているように感じます。

3 仮設住宅への戸惑い モビリア避難所でも、万石浦中避難所でも、仮設住宅にもいよいよ人が移り始めています。まだ足りてはいない現状にある仮設住宅についても、いろいろな実情が聞こえてきます。せっかく抽選であたっても入居しない、入居しても避難所に戻ってきてしまう…などです。こうした話しは、実は仮設が建ち始めた頃から避難所の運営にあたっている人たちから耳にしていたことでした。食料を自前で調達しなければならなくなる、車がないのにそれが本当にできるのか、今までのコミュニティから切り離されてしまわないか、etc ……。「始まってみないとわからないけれど、みんな不安に思っている」。モビリア避難所の責任者千田さんから以前に聞いた言葉です。

モビリア避難所にはスーパー「イオン」の出張所も開店しました。陸前高田のスーパーと言えば、津波の中で形だけ残った「MAIYA」が有名ですが、避難所にできたのは「イオン」です。ここでこれからどのようなコミュニティがつけられていくのか、不安な船出であるかもしれせん。

たしかに、避難所で生活する人は徐々に減っています。しかし、それは仮設住宅へ移っただけではなく、様々な事情から、被災した自宅へ戻ったりしている者も相当数あるのだそうです。ライフラインもまだ完全復旧ではない中、私たち外部にはわからない多くの課題がありそうです。

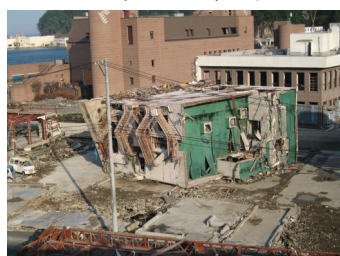
4 子どもたちの記憶の行き先? 万石浦の子どもたちへの支援が始まってちょうどひと月。子どもたちの「荒れ」については前回の支援通信でも報告しました。今回の支援でも、子どもたちの様子は大きく変わることはありませんでした。そんな中で、支援者の大学生に一人の女の子が訴えました。「学校に行っているけど、津波のことを思い出すとお腹が痛くなっちゃう。周りの友だちも一緒だよ」。大人でさえ不安と不自由な生活。子どもにとっては、その奥に被災の傷を抱えていても、整理するきっかけさえありません。子どもたちは、心の深いところに、そうした記憶を押し込んでしまうしか道はないのでしょうか。

写真は、子どもたちの自転車に貼られている「がんばろう、〇〇」というステッカーです。そのステッカーが、子どもたちの気持ちとはかけ離れているようにも思えました。支援していても、私たちの



限界を感じさせられることが多いのが現実です。万石浦の子どもたちの支援については、その目的や方法をもう一度整理していく必要があるように思われます。

【女川】 石巻の隣の女川まで足を伸ばし、被災の状況を見てきました。陸前高田や石巻と変わらず、潰滅的被害に、やはり目を覆う現状でした。瓦礫の多くは取り除かれながらも、横倒しになったビルや鉄骨が、津波のすさまじさを物語っていました。地盤沈下も激しく、防波堤はその頭がやっと海からでている状態です。



石巻も女川も、海辺にその地域の主幹産業が集まっていたのですが、水産加工工場も、製紙工場も、漁協もみんな流されました。そのため、避難所の方も、仕事がないことへの不安を話されていました。基幹産業の復興は、いつになるのか、先の見通しのない復興プログラムのもとで、生きることの難しさがそこにはあります。かといって、長年慣れ親しんできた仕事を、「転職」というように簡単に代えられると考えるのは、仕事と生活を簡単に分断できる人のみの発想のように思われます。

陸前高田の広田湾は静かな湾で、被災前には蠣やホタテの養殖の筏がたくさん浮かんでいました。しかしそれらのすべてが陸に打ち上げられた今、養殖業者のほとんどが転職を考えるしかないという話を聞いたことがあります。地域コミュニティの中心となる産業は、被災3ヶ月を過ぎた今も、その先が全く見えていないのが現状です。

【目的のために集まる】 モビリア避難所での学習支援は、当初から1日だけの支援では不十分というすたんどばいみーの判断のもと、土曜日終日と日曜日午前の子もたちへの支援活動が行われてきました。しかし、万石浦避難所での学習支援は、後発であったこと、マンパワー不足を心配しながらも、ニーズに対応する必要から活動を進めてきました。そのような中で、大村はまの会の事務局長をしている荻谷夏子さんの参加により、万石浦避難所での支援活動を広げる可能性が出てきました。

そのタイミングで、東京理科大学理工学部応用生物学科の今井美里さんからの相談がありました。今井さんは、5月中旬に、大学を5日間休んで、石巻市に自らの足で、瓦礫撤去のボランティアに加わったとのことでした。決して体も大きくない自分が、瓦礫撤去の手伝いにどれだけ貢献できるかは不安だったそうですが、それでも、活動に加わった5日間、体が小さい者は小さいなりにできることを実感したそうです。しかし、大学自体は平常通りの授業であり、かつ、教職課程を履修している学生の多くは、土曜日に開講されている授業もあります。今井さんの相談は、「日曜日だけでもいいから、支援活動を継続する方法はないのか」ということでした。その昔、私たちが学生だった頃、学生は「時間があっても、お金がない」ということでしたが、今の一般的な学生は「時間もお金もない」ということのような感じました。

そのような中で Ed.ベンチャーからの提案は、「1人でできることではないので、日曜日単独で支援活動を継続できるグループを作りなさい」ということでした。その結果、学科、大学を越えたグループができあがりました。6月11日夜発～12日夜戻りの日曜

日の万石浦避難所の学習支援活動グループです。かれらのグループは、スタートしたばかりで、海の者とも山の者ともわからないという状態ですが、それでも、目的のために人が集まる／集めるという経験、自分の目で現実に起きていることを確認するという経験、そして、そこで必要なことを感じ取り、自らの日常生活を問い直すという経験に生かしてほしいと願いつつ、学生企画の支援の今後を見守っているところです。

【今後の支援の予定】 6月14日現在

■ 6月18日(土)～6月19日(日)の第12回支援(3部隊構成)

土: 小友・広田中の支援物資運搬、モビリア避難所の子も学習支援(すたんどばいみー)、万石浦中学校避難所子も学習支援

日: モビリア避難所子も支援(すたんどばいみー)

万石浦中学避難所学習支援(学生グループ)

【ご協力いただきたいこと】

1. ご提供いただきたい物資 ※夏の季節に必要と思われる物品をご提案ください。
2. 同行していただける方 ※参加可能な週末をお知らせください。

【ご協力に感謝!!】

■ 今回の支援隊のメンバー(17人)

柿本隆夫(引地台中学校)、家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、金子尚弘、金子伝、荻谷夏子、富樫武司(大和市農政課)、伊藤拓馬・富田希(東京理科大学学生)、宮脇英理・長畑シゲミ・宮脇アンディ(すたんどばいみー)、本田信之(中央大学生)、今井美里・川野雄大・佐々木飛翔・佐藤岳也・林佑樹(東京理科大学学生)

■ 小友小中学校 支援物資の提供: 理科備品、ソフトボール道具

■ 広田小中学校

支援物資の提供: 理科備品、裁縫セット、卓球道具

提供理科備品リスト: 薬品数種、沸騰石、単一乾電池、線香、クリップ(藁・鱈)、磁石、ニュートンばかり、塩化コバルト紙、BTB溶液、リトマス紙(青)、マッチ

■ モビリア避難所 すたんどばいみーの子も学習支援(5人、2日間のべ7時間)

■ 三上教材社(教材業者) 技術科教材の検討

■ 万石浦中学校避難所 子も学習支援(13人、土・日、のべ13時間)

■ ご協力いただいたみなさま(敬称略、順不同、物資・寄付を含む) 6/3～6/9

東京理科大学体育研究室、松永雅史(大和市学習支援室)、佐々木亮(東京理科大学)スタッフ(代表取締役 上杉浩司)、藤原商会(代表取締役 藤原信高)、内藤材木店、河村匡祐(大和中学校)、高根佳子(東京理科大学)

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (Ed.ベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

